医学部探訪
順天堂大学

「名医たらずとも良医たれ」。順天堂大学医学部で語り継がれる格言の1つだ。その順大で今、「名医かつ良医」の出現が待ち望まれているという。大学の国際的な展開に、世界に通用するパイオニアの存在が必須だからだ。実現への準備は着々と進んでいた。

「名医かつ良医」育成にシフト

国試合格率No.1は通過点にすぎず

医学生も大学院単位を取得可 1年生にTOEFL受験義務化

「名医たらずとも良医たれ」の格言を遺したのは第5代堂主（塾長に相当）の有山登氏だ。良医の解釈には様々あるが、「患者の立場で考える医療を提供し、患者を一人の人間として見て病気を治す医師」と説明されるのが一般的なようだ。一方の名医は、医学界のパイオニアと解される。

「有山先生の言葉は名医を目指すことを否定したものではない。私は今の順大生が目指すべきは『名医＝良医』だと思っている」。こう話すのは医学部長で脳神経外科教授の新井一氏だ。学生たちには日ごろから「臨床医の心を持った研究者であれ。研究者の心を持った臨床医であれ」と語り掛けているという。「名医であって良医、良医であって名医」。この2つは不可分の価値観との理解だ。

国試合格率上位の継続を重視

創立177周年を迎えた順大は現在、医学部、スポーツ健康科学部、医療看護学部、保健看護学部、国際教養学部の5学部と、3つの大学院研究科、6つの医学部附属病院からなる。目指しているのは「健康総合大学」で、中核にあるのが医学部だ。6病院で3202床という全国でも最大規模の病床群を擁する。病院部門の収入は大学事業全体の80％超を占めるまでになっている。

その医学部に近年、大きな出来事が2つ起こった。1つは学費（学納金）の大幅な引き下げだ。1999年、2008年、そして12年の3回の引き下げで、6年間合計で3000万円を超えていた学費を2080万円とした。これにより、私立大の医学部の中では最も安い水準となった。もう1つは、15年の医師国家試験の合格率が、3大学同率ながらも80大学中1位となったことだ（30ページ**図1**）。

学費を引き下げた理由は後述するが、より学力の高い学生が入学するという結果につながった。大手予備校の偏差値の推移を見ると、学費値下げ前は60台前半だったが、最近は70近くと上昇し、今や最高ランクの大学群に名を連ねている。

新井氏に、「学費が安くなったことで学力の高い学生が集まるようになり、それが国試合格率1位につながったとの見方があるが？」と尋ねた。新井氏は「確かに以前にも増して優秀な学生が集まるようになったが、それだけで1位を達成できたとは考えていない」と回答。「そもそも順大は、学力だけで学生を選抜しているわけではな

い。医師として必要な感性豊かな人間性を備えた学生を求めており、選抜で小論文試験や面接試験などを重視しているのはそのためだ」と続けた。

「我々としてはその年の合格率でなく、過去10年間の平均合格率が80大学中2位、過去20年間で見ても2位と、常に上位を維持できていることの方を重くみている」とも付け加える。

では合格率が常に上位を保っている理由は何か。新井氏は「少人数のグループを設定し、それぞれに担任を置いて学生一人ひとりにきめ細かく対応するという順大方式の医学教育が功を奏した結果」と総括する。それはカリキュラムにおいても、生活指導の面でも徹底している。「我々教員は、学生の医師を志すモチベーションをいかに維持し高めるかに腐心している」(新井氏)。

消化器外科と医学教育研究室の先任准教授である冨木裕一氏は、「学生が、一緒に入学した仲間と卒業するという意識を強く持っているのが強み」と話す。そもそも、毎年十数名が国試に失敗する大学と、1〜2人ほどしか不合格にならない大学では、学生一人ひとりの国試に臨む緊張感が違うという。「毎年のように、進級が危うくなる学生は出る。崖っぷちに立つ本人は必死になってあがくし、何より仲間が引き上げようと自発的に支援することが良い結果を生んでいる」(冨木氏)。

こうした仲間意識が醸成されているのは、1年生の時に全員が寮生活を送ることに秘密がありそうだ。医学生はスポーツ健康科学部の学生とともに過ごすが、そこで多くの刺激を受けて、全く異なる領域で自らの夢をかなえようとする者同士が互いに尊敬し合うようになるという。

医学部長の新井一氏。順天堂大学1979年卒。2002年に脳神経外科教授就任。専門分野は頭蓋底外科、小児脳神経外科。米国立衛生研究所(NIH)への留学経験を持つ。チーム医療が基本の脳神経外科において、様々な職域のプロ集団を率いる指導力には定評がある。

基礎研究と英語にも注力

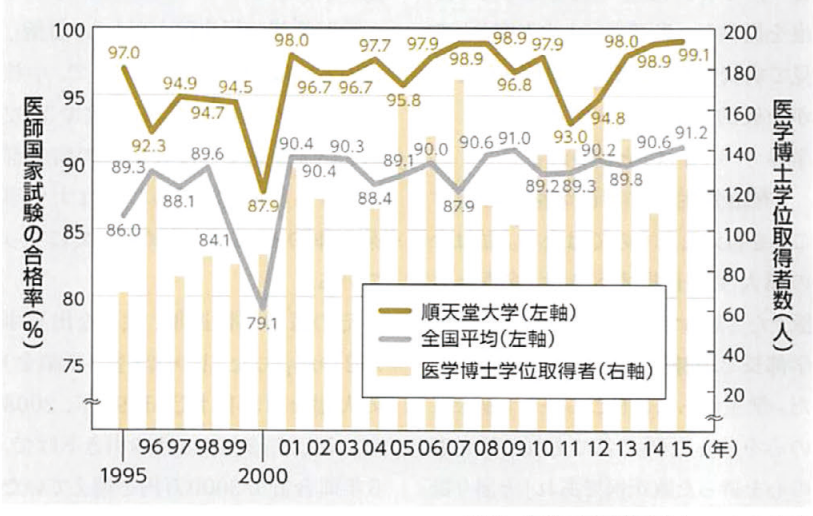
順大は学生のモチベーションを高めるための環境づくりにも積極的だ。最近では2012年度に、基礎研究医養成プログラムがスタートした。

通常は医師免許取得後、2年間は初期臨床研修を受け、その後に大学院で4年間学び博士号を取得する。これに対し、順大の基礎研究医養成プログラムでは、初期臨床研修と並行して大学院の課程を進めることができる。博士号取得が早まり、基礎研究医としての人生を早くスタートできるようにしたのだ。また、初期臨床研修を受けずに卒後直ちに大学院に進む、診療に携わらない研究医用の「基礎研究まっしぐら」のコースも設定した。

事前準備も怠りない。1年生を対象に医学研究入門講座を開設したほか、プログラムに登録すれば2年生から研究活動を開始できる仕組みを導入。同時に大学院での講義を受講可能とし、学部に在籍しながら大学院課程の単位も取得できるようにした。2012年度から文部科学省のグローバル医師養成事業に採択されてスタートした同プログラムでは、これまでに17人が大学院単位を取得するまでになっている。

もう1つ、モチベーションを高める意味で力を注ぐのが英語教育だ。順大医学部では2013年度から1年生全

図1　順天堂大学の医師国家試験合格率、医学博士学位取得者数の推移



(出典:写真で見る順天堂史175年の軌跡)

員に、インターネットを利用した英語テスト（TOEFL iBT）の受験を義務化した。「これまでも紙ベースの英語テスト受験を実施してきたが、今後の国際化への対応を踏まえて義務化に踏み切った」（新井氏）。

また、通常カリキュラムとは別に「順天堂国際医学教育塾」を立ち上げ、学生だけでなく臨床研修医や大学院生も対象に複数のコースを用意し、英語力の強化を支援している。

図1には医学博士学位取得者の推移も示したが、年々その数は増加しているのが見て取れる。「名医かつ良医」の考えが浸透してきた証しといえそうだ。基礎研究医養成プログラムや英語教育の強化が加わることで、今後さらに増加していくのだろう。

学費値下げの背景に存続の危機からの脱出

学費の引き下げの提案があったときは本当に驚いた――。当時を知る関係者はこう語る。

小川秀興氏。順天堂大学1966年卒。学生時代に無医地区無料診療団を率いる。東北から沖縄、さらに東南アジアへと活動の場を広げ、後の国際交流の礎を築く。財政危機にあった順大の再生を成し遂げ、「中興の祖」と称されることも。座右の銘は「夢」。

1回目の値下げが実現したのは1999年のこと。当時、医学部長だった小川秀興氏（第9代堂主）の発案だ。図2を見ていただきたい。順大全体の借入金は、平成に入り年々膨らんでいた。94年には450億円に達し、一時は銀行管理かともささやかれるほど財政は危険水域にあった。

そんな中、96年に医学部長に就任した小川氏は、当時の4病院の院長会議を開催、病院運営の点検に着手した。98年には、テナントビルに分散していた大学施設を集約するなどしてコストを削減、同時に伊豆長岡病院の増床を図るなど収入増の道も開いた。

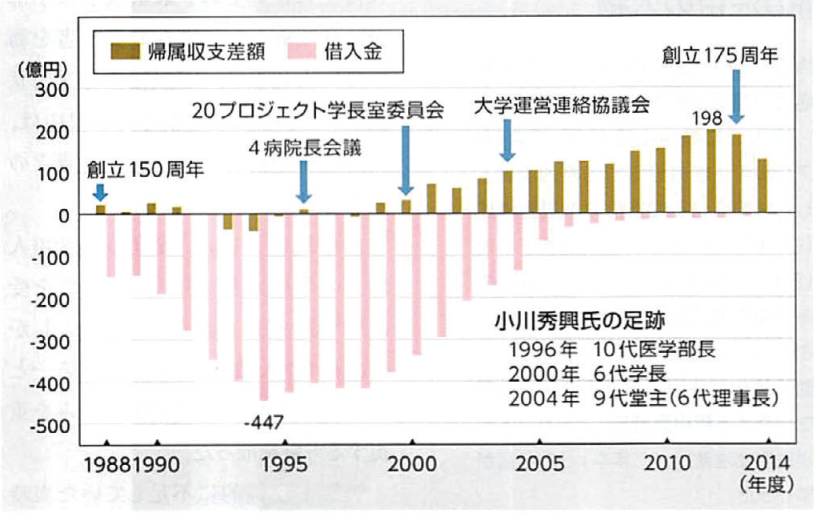
そして99年には、最初の学費値下げを実現した。この年の収入（帰属収支差額）は25.2億円の黒字となり、借入金も380億円と最悪期を脱していた。同窓会を通じた卒業生らによる資金援助もあり、借入金解消の道筋が見えた頃でもあった。

小川氏の学費引き下げの提案理由は、「黒字化した分は社会に還元すべきだ」というもの。幹部の多くは驚嘆し、そして賛同した。「学費が高いために、医師になりたいという夢を諦めている学生を何とかしたかった」。この小川氏の思いに異を唱える者はいなかった。

小川氏の大学改革は、2000年に学長に就任後、加速した。学長室委員会を立ち上げ、大学全体の運営点検を実行に移した。学部・病院間の壁を越え、教員、医師、看護師、技師、さらに事務職員らの職域を横断したプロジェクトを次々に立ち上げた。計20のプロジェクトは、例えば「手術室の有効利用」「内視鏡室の有効利用、検査業務（CT、MRIなど）の効率化」「外来診療問題の検討」などの診療面から、「インターネット網の整備」「経営情報インフラの早期確立」「薬剤・医療材料の共同購入」「光熱水費の削減」「業務委託費の削減」などの経営面まで広範囲にわたるものだった。

「改革に当たっては、全職員が誇りを持てる大学であることを第一に考え

図2　順天堂大学の帰属収支差額と借入金の推移



（出典：写真で見る順天堂史175年の軌跡。一部改変）

写真（新井氏、小川氏）：小林　淳

た」。こう話す小川氏は、第9代堂主に就任した2004年に、学長室委員会を大学運営連絡協議会に改組し、改革を継続した。

当時を知る関係者は、「職域や病院間の壁を越えた委員らで、大学の危機的状況を示すデータを共有し、解決策を議論できたことは、順大再生の原動力になった」と述懐する。

小川氏は2014年春に開催した創立175周年の記念式典の挨拶でこう述べている。「"今、ふたたび『仁』"の理念を掲げてまい進していく」。「仁」は順大の学是となっている言葉だ。儒教の教えにある「人在りて我在り、他を想いやり、慈しむ心。これ即ち『仁』」に由来する。

なぜ「今、ふたたび」なのか――。小川氏はこう答えた。「財政危機を脱した今こそ、順大の原点を忘れてはならない。仁は、創立以来177年という歴史の中で、常に大学の支柱として存在してきた。順天堂人にとって、仁はこれからも大切に引き継いでいかなければならない精神だ」。

酒井シヅ氏。三重県立大学医学部1960年卒。順天堂大医学部医史学研究室の第2代教授。現在も特任教授として医史学を究める。村上もとか著のコミック『JIN－仁』（集英社）において医史監修に当たる。『戦国武将の死亡診断書』『病が語る日本史』など著書多数。

「仁」の源流に見る「世界的名医」の必然

順天堂大学医学部には医史学というユニークな研究室がある。「医療の最先端を担う場にこそ、医の歴史を真摯に学ぶ研究の場が必要」と説く初代教授を務めた小川鼎三氏を迎えるに当たって、当時の有山理事長が1962年に創設したものだ。

2代目教授で現在も特任教授として医学生に医史学を教える酒井シヅ氏に、「今の順大に足りないものは何か」と尋ねた。酒井氏は「世界的に活躍する名医がもっと生まれること」と即答した。国際化を推し進める順大にとって、例えばノーベル賞級の「世界的名医」の出現が待ち望まれているというのだ。

もちろん、順大に「世界的名医」がいないわけではない。今回の取材やアンケート調査で名前の挙がった注目の人物は、超音波の創始者として知られる和賀井敏夫氏やラジオ波治療で実績のある椎名秀一朗氏らだ（左下別掲記事）。確かに順大卒業生の名がもっとあってもよさそうだが、残念ながら、「卒業生からの世界的名医が相次ぐ」という理想にはまだ遠い。

研究至上主義に反発した先達

酒井氏は、先達のこんなエピソードも話してくれた。

1872年のこと。明治政府から大学大博士に任命され、東京大学医学部の前身である大学東校の責任者を務めていた佐藤尚中氏（後の第2代堂主）は、その要職を辞した。理由は、明治政府が招聘したドイツ人教師との教育方針の違いだった。

尚中氏の元には、全国から300人以上の学生が集まり、医学教育を受けつつ診療にも当たっていた。しかし、ドイツ人教師らは教育を第一とし、そのために必要な症例のみを重視する方針を取った。

医師が圧倒的に不足していた当時の日本にあって、優秀な臨床医の育成

順天堂大学医学部の注目の人物

今回の取材や日経メディカルOnlineの「医学部実力アンケート」で挙がった順大にいる注目の人物は以下の通り。

超音波診断の創始者として名高い**和賀井敏夫**氏（新潟医科大学1949年卒）、アルツハイマー病およびパーキンソン病の領域で世界屈指の研究を続ける**水野美邦**氏（東京大学65年卒）、糖尿病の特にインスリン治療の分野で功績のある**河盛隆造**氏（大阪大学68年卒）と同氏の後を引き継ぐ**綿田裕孝**氏（大阪大学90年卒）、ラジオ波治療において世界をリードし続ける**椎名秀一朗**氏（東京大学82年卒）ら。

順大の卒業生に限ると、皮膚科・アレルギー学の分野で国際的学者としても知られる理事長の**小川秀興**氏（66年卒）をはじめ、小児鏡視下手術（腹腔鏡・胸腔鏡）で数多くの実績のある**山高篤行**氏（小児外科主任教授、85年卒）、血管生物学の専門家として動脈硬化性疾患における炎症の役割を研究する**相川眞範**氏（ハーバード大学医学部准教授、87年卒）らの名前が挙がった。

こそ急務と考えていた尚中氏は、これに反発。同志とともに、私立病院博愛舎を開院。次いで私塾を開設し、診療と医学教育の両方に心血を注いだのだった。これが現在の順天堂医院の始まりだ。

目の前の患者を研究のための症例と見るのか、病を抱える人間として接するのか――。順天堂医院の選択は後者だったのだ。学是である「仁」の源流は、こうした先達の行動に端を発している。

「基礎と臨床の両面での医学教育」の充足を図った先達たち。その歴史の積み重ねの上に、世界的名医が順大から生まれるのは、必然ともいえるのだ。

目下の課題は国際化 同窓会の視線もアジアに

繰り返しになるが、順大が今、大学全体として最も力を入れているのが国際化だ。今年度に誕生した国際教養学部が代表格だ。

医学部を中心に見ても、2010年に

森近浩氏。順天堂大学1959年卒。4260人の会員を率いる同窓会会長。「大学と同窓会が両輪になることが夢」と話す。インターネット上に構築中の「同窓生勤務先施設マップ」を手始めに、大学の病院群と同窓会会員の医療施設との連携に挑む。

ドイツのシャリテ・ベルリン医科大学と学術協定を結んでおり、北京大学とは07年から国際交流を深めている。また、11年には第1回国際スポートロジー学会を開催し、生活習慣病の管理の柱である運動療法や心理療法のエビデンスを研究する場を整えた。その後も国内外の大学、研究機関などと共同研究を行う環境づくりを急いでいる。また毎年のように、アジアを中心に多くの留学生を受け入れている。

こうした大学の動きに呼応するように、医学部の同窓会も国際化を見据えた動きを加速させている。同窓会長の森近浩氏は、「大学とともにアジアの医療センターを実現する検討に入った」と意気込む。全体像は**図3**のようになる。これは、本院である順天堂医院をセンター機関と位置付け、他の5つの医学部附属病院や連携を強めている病院群、さらには都道府県の同窓会関連の医療施設をネットワーク化しようというものだ。現在、同窓会主導で同窓会員の勤務先である全国約4000カ所以上の診療所、一般病院のほか、関連の介護施設などのデータベースを構築中だ。

日本の医療体制は今、病床機能の厳格化と医療施設の役割分担の明確化に向かっている。病診連携や病々連携は待ったなしだ。同窓会を巻き込んだネットワークの構築は、日本の医療の今後を見据えた動きでもある。完成すれば、日本で最大規模の医療グループが誕生する。

「ネットワークは研究面でも生きてくるはずだ」(森近氏)。実際にその第一歩は踏み出されている。心房細動の登録研究をはじめ6つの臨床研究が動いている。森近氏は「このネットワークが稼働すれば、診療においても臨床研究においても、順天堂医院は東洋を代表する医療センターになっていく」と期待している。

かつて「良医たること」を信念に、地域医療に乗り出していった卒業生らもまた、臨床研究への意欲を膨らませている。順大医学部は既に、卒業生ともども「名医かつ良医」の時代に踏み込んだといえよう。

(三和　護=編集委員)

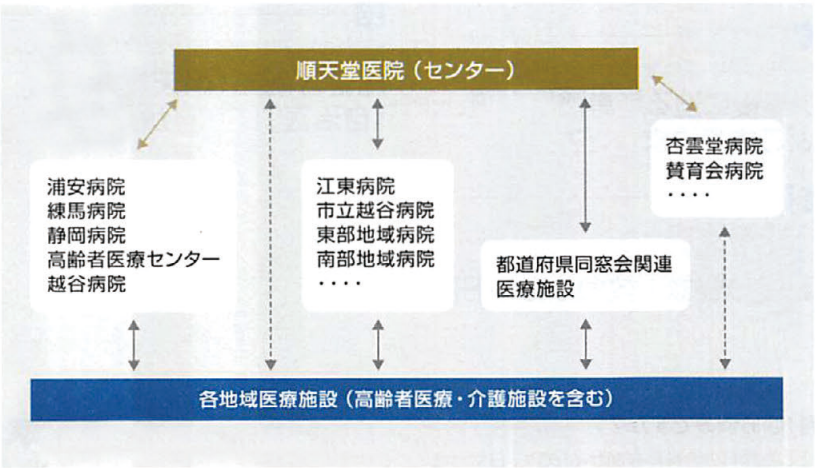



図3　順天堂大学の病院群と同窓会員の医療機関との連携図(提供:森近浩氏)